

長野県の植物覚書

今井建樹 (岡谷市長地東堀3491-4)

Kenju Imai: New and noteworthy plants in Nagano Prefecture

平成10年度までに野外で観察した主なものをここに挙げて記録にとどめたい。関係識者のご叱正を願うものである。

1. キリガミネヒオウギアヤメの内花被片の変異について

Variation in inner tepals of *Iris setosa*
Pall. ex Link var. *hondoensis* Honda

キリガミネヒオウギアヤメは霧ヶ峰の八島湿原だけに生える固有変種である。

本品は飛田 (1934) によって霧ヶ峰八島湿原の一ヶ所だけに群生しているのが発見され、本田 (1937) によってヒオウギアヤメの変種 *Iris setosa* Pall. ex Link var. *hondoensis* Honda として発表された。しかし、その後1941年同氏によって *I. hondoensis* (Honda) Honda に格上げされた。現在、多くの図鑑等では前者の

学名 var. *hondoensis* Honda が使われている。

本田・飛田 (1941) によると、ヒオウギアヤメに比べて花が大きく、内花被片が針状でなくペン状をなす点が異なるとしている (図1)。

大井 (1965) によると、本変種はヒオウギアヤメとカキツバタの雑種かと推定され、種子をつけず、茎は葉よりも長くならず、分枝は少なく、苞はやや大きく、花は少し大形で、径11-14cm、内花被片もやや大きく、長さ2.5cm内外となり、葯は長さ約15mmである。また佐竹 (1982) によると、花がやや大形で11-14cm。内花被片はへら形で、長さ25mm内外あり、先が凹入したところに芒状の突起がある。キリガミネヒオウギアヤメのように稀少なものは数少ない標本だけの測定によるため変異の状況がむずかしいと思われる。

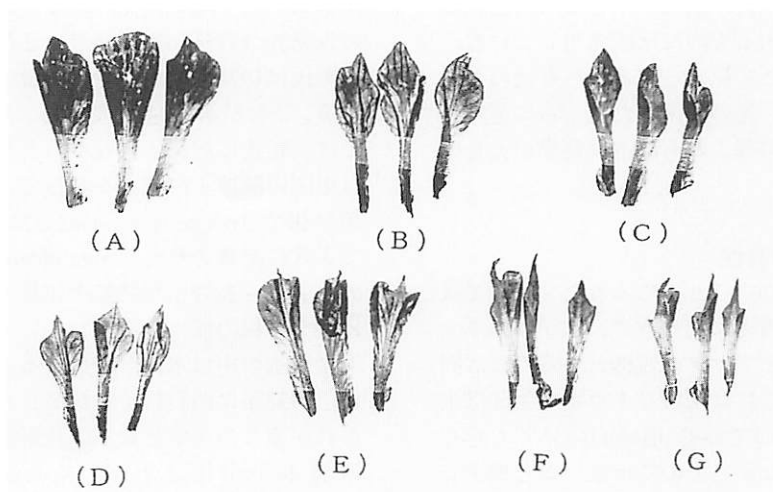


図1 キリガミネとヒオウギアヤメ内花被片の変異 7個体から採取 (1997.7採)

現地で内花被片を観察した結果、図のようにその変異が非常に大きいことに気付いた。そこで内花被片の大きさ、ペン状になっていること、種子が出来ないことから雑種であるとの推定等について、内花被片の変異をもとにして考察を試みた。

(1) 内花被片の長さ

測定値(単位mm) A~Gは個体、1個体1花について測定した。

(A) 30	32	34	(B) 28	29	32
(C) 25	27	27	(D) 24	25	26
(E) 26	28	29	(F) 24	29	30
(G) 22	25	27			

最大 34mm 最少 22mm 同一花の長さの差 6mm>2mm

調査した花の数は7花であるが、内花被片の長さは34mmから22mmになっていることからみて35~20mm位とするのが適当と思う。また同一の花の内花被片であっても6mm(2割内外)もの差のあることは非常に変異の大きな花だといえる。

(2) 内花被片の形 (39ページ図1参照)

(A)と(B)は必ずしもペン状とはいえないものである。(C)(D)はペン状に該当し(E)(F)(G)は先が凹入したところに芒状の突起があるとするものにほぼ該当している。

全体をどうして見たところ、へら状のも、先が尖るもの、先の凹入したところに芒状の突起のあるもの等これも非常に変異が大きいと言える。

(3) 雑種の可能性

種子ができないことからみると、雑種ではないかとする考えは成り立つ。しかしカキツバタとヒオウギアヤメの雑種とするのには問題がある。ここには現在ヒオウギアヤメは生育していないのである。地域的に見ても恐らく分布していなかったのではないかと推定している。

結実しないことと、内花被片だけ見ても非常に変異が大きく、安定した形態をもってい

ないことからして何等かの雑種である可能性は否定しきれない。

横内(1983)によると、美濃原の蛙池に記録されているが、この事実を確認していない。

引用文献

- 本田正次・飛田廣 (1941) 霧ヶ峰の植物 205-206頁 厚生閣
大井次三郎 (1965) 日本植物誌 391頁 至文堂
佐竹義輔 (1982) 佐竹義輔ほか (篇) 日本野生植物 I 62頁 平凡社
横内 斎 (1983) 信濃植物誌 269頁 信濃植物誌刊行会

2. カイサカネランの新産地

1998年8月22日釜無山地で見た事の無い奇妙なランが目止まった。この時は花が咲き始めたばかりの所であったので、9月1日に同地を再度訪れて観察した。この時は開花の最盛期であった。

この未知のランが何であるか見当も付かないので、井上健氏に同定願った所「カイサカネラン」(口絵グラビア)であろうということになった。

カイサカネランは1948年古瀬義氏によって、山梨県の三つ峠で発見されて、檜山氏が和名のみ発表(野草16巻6月号)された。その後古瀬氏は1977年に長谷村の戸台でも発見している。これが第2の産地である。ところが日本では、正式に記載されなかったため、古瀬氏は中国の陳博士に標本を託して、中国植物分類学報で *Archineottia japonica* M. Furuse として正式に記載された (Acta Phytotax. Sin. 26: 69, 1988)。長野県植物誌の編集のため、井上氏がラン科の標本整理をしていて、横内斎氏寄贈標本の中に本種が1点あることを確認した。1938年に四賀村から採集されたもので、これが第3の産地となる。長野県植物誌にこの標本が引用されて、*Neottia japonica* (M. Furuse) K. Inoue と記載されている。

カイサカネランは稀な植物のようで、古瀬氏はその後何度も戸台にカイサカネランを探

しにいったが見つめることが出来なかったと述べており、既に絶滅してしまったのではないかと危惧していた（井上氏談）。

第4の産地となる釜無山地は標高1,100mの落葉広葉樹林下の腐葉土の厚く堆積したところに生えていた。そこには他の草本植物は全然生えておらず、落ち葉が地面を被っていた。イヌブナ・ミズナラ・イタヤカエデ・トチノキ等の高木があまり密生せず、やや平坦な地形で、広々とした感じのする所である。この場所の基岩は石灰岩である。そこはニホンジカやイノシシ等の遊び場らしくその痕跡があり、カイサカネランも何本か傷つけられたものがあった。

カイサカネランはサカネラン属 *Neottia* に含まれる。従来この属は日本ではサカネランとヒメムヨウランの2種があるとされていたが、カイサカネランを含めて3種となる。この属は根がやや多肉、線形で、多数が短い根茎に束生し先が上向く（逆根）ことからこの名がある。しかしカイサカネランは根の先が余り上向しない。また、この属は腐生ランで葉緑素をもたないとされているが、カイサカネランは花と花を付けている茎までは緑色である。他の2種は普通淡黄褐色と赤褐色であり葉緑色を持っていない。このこともこの属の中では異質である。

根茎にはこの時期すでに来年度に備えて白色の芽が出来ている。2芽を持ったものが観察され、年数がたつにつれて何本かの茎を持つ株になっていくものと思われる。現地での観察結果最高8本の株があり、5本・3本・2本・1本等合計13株41花茎が確認出来た。花期については先に書いたように9月1日が最盛期ではあったが、この時期地上に出たばかりで固い蕾のものもあった。これらから見て同一産地であっても花期は相当長期に亘るのではないかと考えられる。丈は最大11cmで、開花中のものは凡そ5~6cmのものが多かった。結実すれば更に丈は伸びるだろうと思われる。

花の形や付方等が原記載のものとは若干異なっているが、この程度は変異とみなしてカイサカネランとしてよからうとのことであっ

た（井上氏談）。なお、花の形等が別の株のものと少し差異があり、同一の株のものであっても花ごとに変異のあることも分かった。この様な花の状態はカイサカネランの特徴なのか、あるいは他に何か原因があるのか不明であるが、今後も更に観察を続け究明して行きたい。

カイサカネランの記事を書くにあたって、井上健氏には同定・資料提供等大変お世話になりました。ここに記して謝意を表したい。

3. チチブリンドウの新産地

1998年10月9日釜無山地でチチブリンドウが多産することが確認できた。ここにはこれまで報告がないようなので、新産地として報告したい。

生育地は標高1,000mの石灰岩地である。高木層はアカマツ・ウラジロモミ・イタヤカエデ・シラカバ・カラマツ等の疎林で、中低木にはコナラ・キハギ・クマシデ・ウツギ・ホソエカエデ・フサザクラ等が見られた。草本層は密度が小さく露岩の露出している所に生えていた。

この自生地は大きく2つの群落に分かれており、凡そ10m×5mと7m×5m位の大きさの2群落に分かれていた。この2つの群落は凡そ80mの間隔があり、環境はほぼ同じような状況であった。

確認できた本数は、10m×5mが84本、7m×5mの方が45本で合計129本であった。一株に着く花の数は1花から13花で、2花から4花のものが最も多かった。日当たりのよい所に生えているものはこの時期既に結実しており、多花のものが多かった。木の下などの日陰に生えているものは1花のものが多く、まだ開花中のものも僅かであるがみられた。

長野県内では長谷村の戸台での観察記録を本誌第21号（1988）に発表したのが、それと比較してみると一株に着く花の数は戸台は最高37花のものまであって多花型が多かった。その他の状況はほぼ同じ傾向にあるように思われた。確認出来た生育個体数は戸台58、釜無山地129と釜無山地が2倍をこえている。

県外では初採地の秩父の十文字峠付近のものは現状不明とのことである。最近発見された群馬県の高野郡のものは、1998年9月2日の現地調査で63個体、最高30花であった。また埼玉県の高神山系で5株発見(1998年1月13日毎日新聞)。伊吹山にも自生(私信)しているとのことである。これらは何れも石灰岩地である。このリンドウの生活史には不明の点が多く、1年草または越年草となっているが現在までの筆者の観察結果では冬季には総て枯死し、地上部で越年するものは認められない。また、地下部の茎や根に翌年発生する芽を付けているものは皆無で地下部も枯死する様に見られる。しかし種子から発芽してその年の内に開花するように大きく生長すると言うのも何か疑問が残る。今後更に観察して究明していきたい。

4. カラフトホソバハコベ

Stellaria graminea L.

長谷村の鹿嶺高原で1988年6月25日に確認した。駐車場のすぐ上の道路沿いに見慣れぬナデシコ科の花に出合った。やや大形の花の白さが印象的であった。原色日本帰化植物図鑑によると、北海道や東北地方に分布するナガバツメクサに近いもので、区別点は萼片が尖ること、種子の表面にうね状の隆起線があ

ることがカラフトホソバハコベの特徴となっている。欧亜大陸原産の帰化植物。サハリン産のものから和名がつけられたもの。最初北海道や新潟県の村上市から報告されたが、近年急に北海道に広がりつつあると記載されている。

長野県では現時点では報告されていないようであるのでここで報告したい。その後諏訪市の霧ヶ峰牧場でも確認した。県内でも各地に分布が広がっているだろうと思われる。

5. 黄色花のハシリドコロ

群馬県の松井雅之氏にこれのあることを知らされ、1998年4月19日に佐久市内山の館ヶ沢、標高900m、で確認することが出来た(口絵グラビア)。

現地はカラマツの植林地で、小さな沢沿いの多湿地に生えていた。ハシリドコロの花冠は普通外面は暗紅紫色、時に黄緑色のものもある。ところがこれは鮮やかな黄色で、透きとうのような美しさであった。ここには普通のハシリドコロが沢山あり、その中に9本の黄色花が混生していた。花色以外は普通のハシリドコロと大差がなかった。品種として和名をキバナハシリドコロとしたい。松井氏にここに記して謝意を表したい。